

～平成18～19年度後志教育研修センター社会教育に関する研究～

## 研究主題 『社会教育事業の評価の在り方』

### 1 研究の目的

地域住民の生涯学習支援や生涯学習を通じた地域づくりなどを推進するため、地域住民の声に耳を傾け、社会の要請と地域住民の多様な需要の双方に対応した学習機会の提供や施設整備などを地域住民と協力して主体的に実施することがより必要になってきている。そのため各市町村では全体の実態とその結果を分析するため、実際に評価が行われてきている。

そこで本研究では管内共通様式の評価票を用い、教育的評価にくわえ行財政も含めた事業評価を行うことで、真に必要性があり、より効率的効果的な社会教育事業実施に向けての一助とすることを目的とする。

### 2 研究期間 平成18年度～平成19年度（2カ年）

### 3 研究の経過

#### （1）平成18年度（第1年次）

##### ① 社会教育研究委員会

	日 程	内 容
第1回	18. 5.24（水）	役割分担 研修計画策定
第2回	18. 6.14（水）	平成14年度後志教育局社会教育指導班研究の ふりかえり
第3回	18. 7.18（火）	評価モデル 評価票検討
第4回	18. 8.30（水）	理論研修 (目標に対する評価 自己完結→社会還元)
第5回	18. 9.27（水）	評価具体例の検証 (小原所員試案)
第6回	18. 10.18（水）	各市町村への依頼内容検討
第7回	18. 11.15（水）	第2回社会教育主事研修会協議内容検討
第8回	18. 12.13（水）	評価内容改善点検討
第9回	19. 1.24（水）	2年次にむけての修正点確認

② 市町村の取組

後志管内教育推進資料に基づく領域を各ブロックに按分し、社会教育評価票(案)を活用した事業実施当事者による評価を行う。

<北ブロック>	生涯学習の推進	青少年教育の充実
<山麓ブロック>	家庭教育の支援	文化の振興
<岩宇ブロック>	成人教育の充実	社会教育行政の推進
<南ブロック>	スポーツの振興	地域の教育力の活性化

<提出された事業(例)>

市町村名	事業(例)
島牧村	平成18年度少年ふるさと教室 小学3年生対象「川の生物観察学習」
寿都町	文化振興事業「林家木久蔵・きくお親子落語会」
黒松内町	40・50健康づくりプログラム
蘭越町	ニュースポーツ大会
真狩村	文化振興事業「第1回芸術鑑賞ツアー」
喜茂別町	小学生のクッキングスクール
倶知安町	倶知安町総合文化祭
京極町	子ども読書週間・北海道青少年のための200冊の展示 ～町内児童生徒読書感想文コンクール
共和町	平成18年度第17回共和町海外研修事業
岩内町	いわないモノ知り探偵団
古平町	少年少女わんぱく王国
仁木町	仁木町地域学習活動「地区学級」
余市町	ウィークエンドサークル事業

③ 後志管内社会教育主事等研修会

第1回 5月25日(木)(島牧村) 研究概要説明

第2回 11月30日(木)～12月1日(金)(岩内町)

理論研修・ワークショップ

道立生涯学習推進センター研修調査課主査 柴田暦章氏

第3回 3月1日(木)(京極町) 18年度のふりかえり

(2) 平成19年度(第2年次)

① 社会教育研究委員会

	日 程	内 容
第1回	19. 5.23(水)	平成19年度研究について説明資料確認
第2回	19. 6.13(水)	評価票レイアウト再検討
第3回	19. 7.17(火)	すべての市町村で「青少年教育」に係る事業評価
第4回	19. 8.29(水)	PDCAを明らかにさせるための数値化の検討
第5回	19. 9.26(水)	管内各市町村評価票の検討
第6回	19. 10.15(月)	後志教委協同事業「ぶっくらんど」をもとにした評価研究
第7回	19. 11.12(月)	第2回後志管内社会教育主事研修会協議内容検討
第8回	19. 12.12(水)	平成18～19年度研究のまとめ
第9回	20. 1.23(水)	研究集録読み合わせ 平成20年度研究主題協議

② 後志管内社会教育主事等研修会

第1回 5月25日(金)(共和町) 研究中間報告

第2回 11月30日(木)～12月1日(金)(蘭越町)

○ 「ぶっくらんど」事業をとおした事例研究

○ ブロック別協議

③ その他

後志管内市町村教育委員会社会教育担当者会議

4月24日(火)(倶知安町) 第1年次研究中間報告

## 4 研究の内容

### (1) 理論編① 「社会教育事業の評価の在り方・方策をさぐる」(講義概要)

平成18年11月30日(木) 岩内地方文化センター

北海道立生涯学習推進センター

研修調査課 主査 柴田暦章氏

(現/北海道教育庁生涯学習推進局生涯学習課主査)

#### 1 ついに社会教育もこの「パンドラの箱」を開けざるを得なくなったのか

昔から代々私たち社会教育に携わっている人たちの中で、「社会教育は、評価に馴染まない」といわれてきました。それは、やってもやっても課題がたくさん出てくるからであり、反面、努力の割に次年度への反映がなかなかしにくい状況等もあり「真剣に取り組んでこなかった」ともいえます。

よく、どの市町村にも合った評価シートを求められますが、それは無理です。各市町村によって掲げられている目標が違うわけですから、市町村の数だけ評価シートができるわけです。まさに、評価をするということは、自分の町と対面することであり、課題や現状が浮き彫りになるわけですから、そういった意味でパンドラの箱を開けてしまうことになるのです。

#### 2 行政評価の歴史

行政評価の目的は、プロダクティビティ(生産性)とアカウンタビリティ(説明責任)の2つを追求することにあります。アカウンタビリティという言葉が広く使われるようになったのは90年代に入ってからだと思いますが、きっかけは省庁や都道府県庁を舞台にした一連の不正支出問題。これを契機に情報を秘匿しようとする行政の体質に対して市民オンブズマンの活動が広まりました。

そこで首長としては、「皆さんからいただいた税金はこのように使っています」と、きちんと説明するために行政評価が導入され始めました。いわゆるアカウンタビリティ(説明責任)です。

特に我々社会教育事業を行っている者は、プロダクティビティ(生産性)も考えていかなければなりません。

#### 3 社会教育の評価

社会教育の評価といったとき、大きく2つの側面があります。

ひとつが、条件の評価であり、施設の経営評価、推進体制の評価など環境醸成に対する評価、いわゆる行政評価と呼ばれるものです。

政策、施策及び事務事業について成果指標等を用いて有効性(目標に対する達成度合い)または効率性(活動量に見合うコストの投入度合い)を評価するものです。

二つ目は、学習成果に関する評価で、その事業で学習者たちが何を身につけたのか

を見定めるといふ意味の評価であり、そのためには、学習成果の認証システムが必要になります。

#### 4 なぜ教育評価をするか！

評価は、教育の効果を最大にするための反省と改善のために行うものであり、行政のマネジメントサイクルで言えば、P（プラン）D（ドゥ）C（チェック）A（アクション）サイクルの中でC（チェック）の部分に今まで必ずしも十分でなかったと思われる。評価をすることで初めて反省され改善が生まれる。だからこそ次のAは前よりいい事業になるわけだ。評価をしないと前年と同じ予算で同じ開催要項となり、マンネリになりやすいのだ。

#### 5 行政活動は「目的」と「手段」

例えば、「健康増進」という目標を立てたとします。そのためには「運動」「栄養」「休息」という方法がでできます。そして「運動」について考えた場合、水泳、ウォーキング、スキー…といろいろメニューがでできます。

これを行政活動にあてはめると、「健康増進」が政策目標。「運動」「栄養」「休息」が施策目標。「水泳」などが事務事業となっていきます。それぞれが、目的と手段の関係になっています。

つまり、直接、住民と関わりながら行う事務事業は、最終的には政策目標を達成させるための最初的手段なのです。事務事業は政策目標につながっていくわけですから、いきなり政策目標や施策目標を評価しようとしてもできないのです。

評価手順の中で一番大切なことは政策と施策と事務事業を体系づけることです。また、評価する上で政策体系を意識しなければいけません。目的を明らかにし、目的に対する手段をきちんと評価することで、最終的には政策目標の評価へとつながっていくのです。

#### 6 イメージを共有させるために評価シートを

みなさんの評価表に足りないのは、成果指標と活動指標です。本当は、「有効性」ばかりでなく「必要性」「効率性」「公平性」「優先性」すべてに成果指標と活動指標がないとおかしいのです。同じ「よかった」でも、人によって受け取り方が違いますし、担当者だけで満足して改善しないのはよくありません。誰もが同じイメージを持つためには、指標づくりが欠かせないのです。そのために、この後志管内の社会教育主事会において評価シートなどを研究していることは、とてもいいことだと思います。

#### 7 いつ誰が何を評価するか

評価の検証手段としてのアンケートの在り方としては、事業の事前・事中・事後になります。評価するのは、事務事業を想定すると、当然担当者とか実施者の「自己

評価」、それから参加者・利用者の「参加者評価」、そして関係者、専門家、研究機関等の「第三者評価」が考えられます。

何を評価するかというと、プロセスとアウトプット、アウトカムです。それに、どのくらい予算をかけたとか資材を使ったかなどのインプットも評価しなければなりません。

プロセス評価とは、事業の実施過程を評価すること。ですから、事業が進みすぎたとか遅れ気味とかそういうときにやります。また、目標に到底到達できないというとき、評価をして軌道修正することもあります。

アウトプット評価は、講座の実施回数、参加者数、利用者数などのことで、アウトカム評価は、獲得したい、もしくは実現したいという状態について評価すること、いわゆる目的についての満足度とか地域の学習率の上昇とか、今までの社会教育では難しいといわれていた評価です。特にここで指標を用いなければなりません。

## 8 これからの社会教育の評価

一般的な行政評価は、「これだけお金をかけて、どれくらい人がきましたか」というもの。これに目標に対してどういう効果が表われたかというアウトカムの評価が加わって、初めて社会教育の評価になると思います。評価方法としては、行政内部の評価をさらに進めて、各種委員等を加えた住民参加型評価、評価を専門とする NPO 等と行政と一緒に作りあげる協働型評価方法などが考えられます。

センターで2年前から提案しているのは、感性的な定性的評価ではなく、なるべく同じイメージをもてる数値としてみる定量的評価の活用です。

評価の項目や指標は、その町の目指しているものが違うので、それぞれの町で違って当たり前です。作成する人たちの合意形成がもとなるのです。目的が曖昧だとなかなか評価指標をつくるのは難しいですね。

自分の担当する事業を評価するということは事業を立ち上げて当初の施策目標やねらいを再確認できるよい機会だと思います。

大変な作業ではありますが、是非、これを機会に評価に真正面から取り組んでいただけたらと思います。ご静聴ありがとうございました。

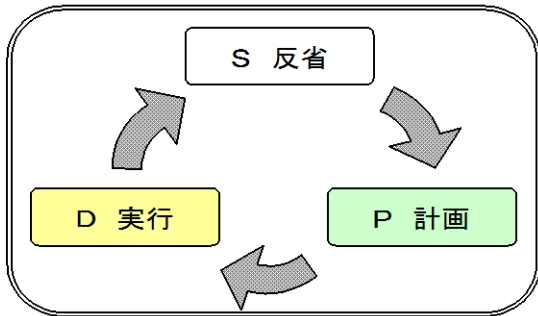
(編集) 社会教育研究委員会

# PDCAサイクルの導入

- P・・・Plan（計画）
- D・・・Do（実行）
- C・・・Check（評価）
- A・・・Action（改善）

## これまで

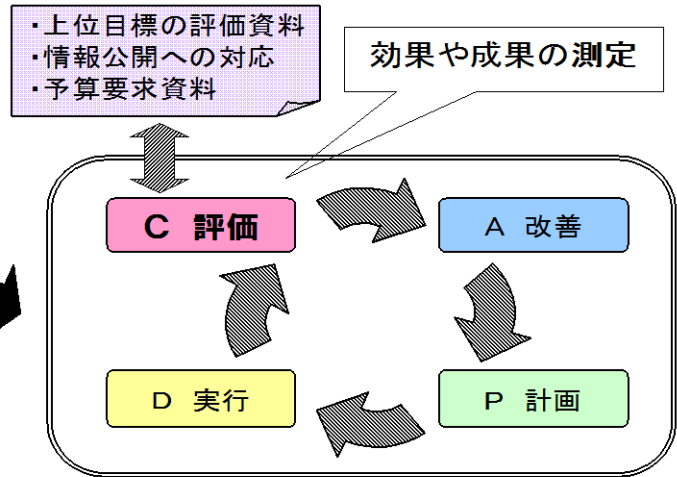
評価の引継ぎがなく、前年度踏襲や停滞感をまねきやすい。



※これまで社会教育事業では、計画の段階で改善したり、実行後に反省を行ってきたが、今後は、すべての事業において、意図的・計画的に評価を実施する必要がある。

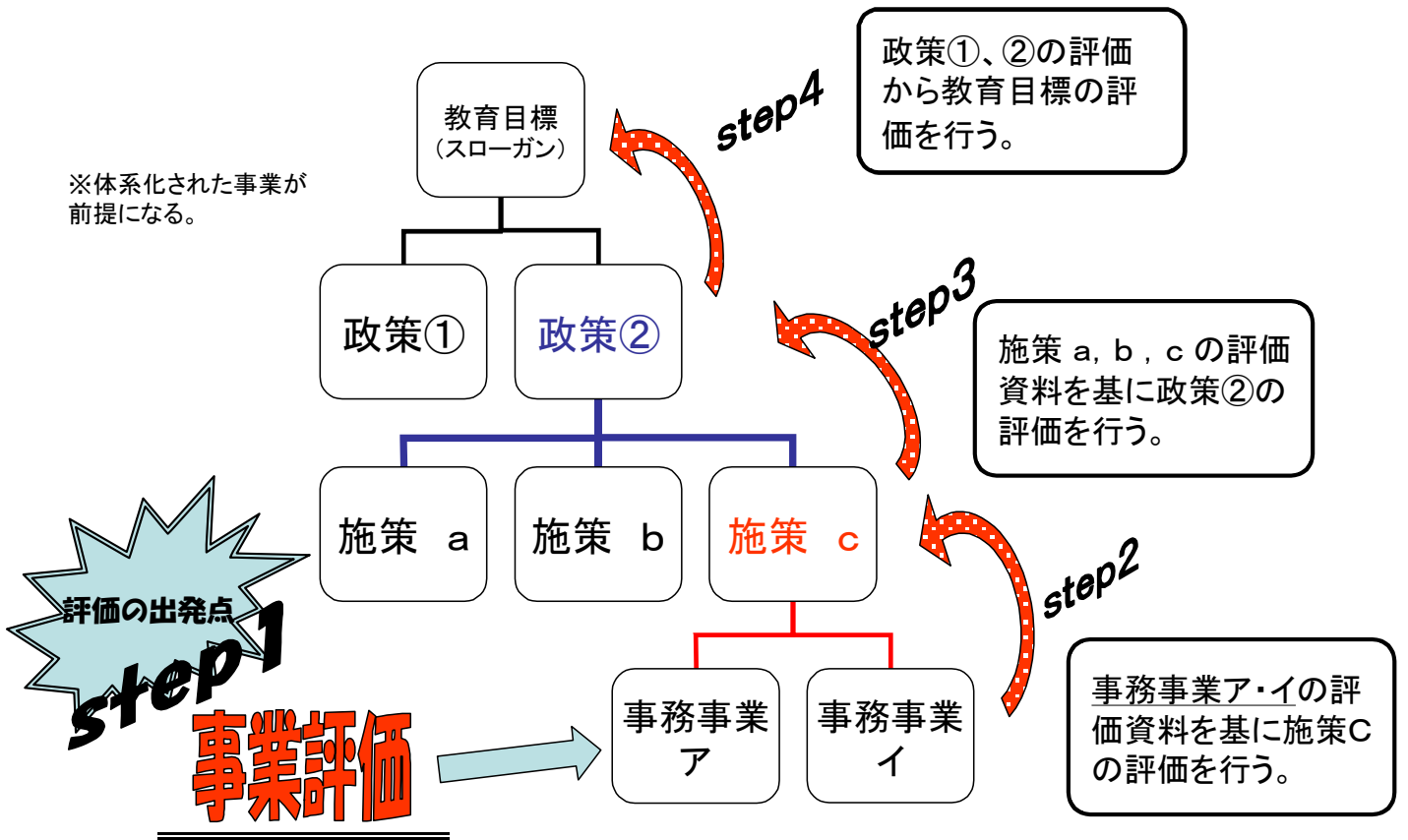
## これから

評価と改善を導入し、事務事業の最適化と行政サービスの向上を図る。

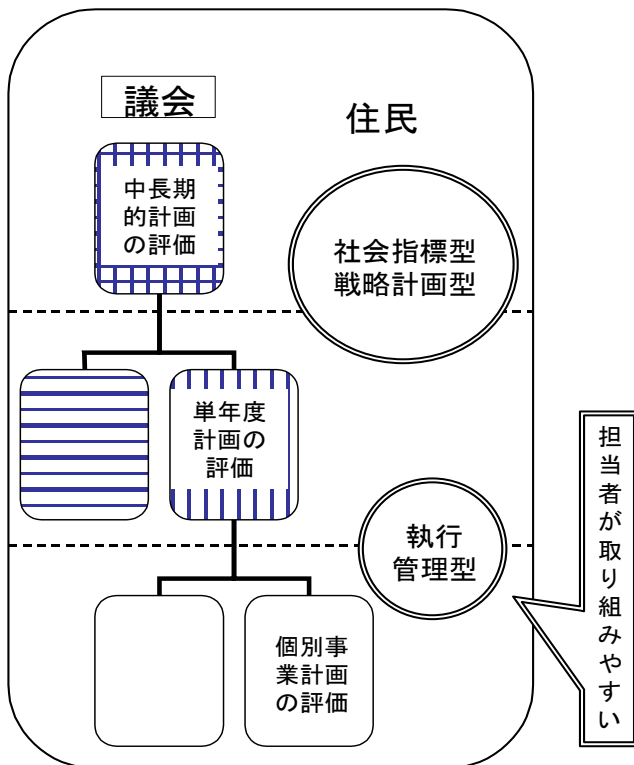


# 事業の体系を活用した評価

※体系化された事業が前提になる。

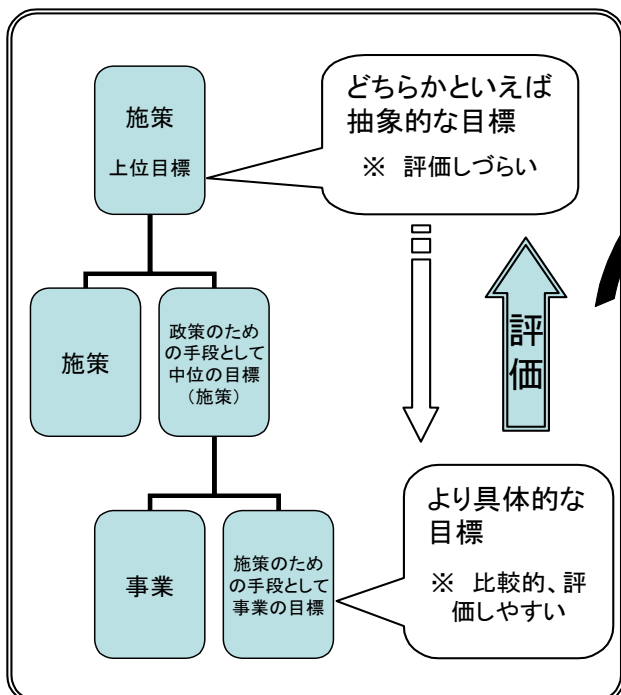


# 諸計画と評価の主なタイプ



	執行管理型	戦略計画型	社会指標型
行政の諸計画	各事業毎 単年度計画	単年度～中期計画	総合計画 中・長期計画
ねらい	事務事業の最適化	中長期的な目標とプロセスの管理	住民の満足感
担当	・担当者 ・係長 ・課 等	・担当課 ・プロジェクト ・各種委員 等	・住民との協働

## 上位目標の評価について



**評価しやすい個別事業の評価を資料にして、上位の目標を評価していく。**

**ポイント**

- ・事業評価からの積み上げ
- ・事業が体系化されていること